

## 第一部 人生と信仰

問1 なぜ信仰する必要があるのですか。

答 人間はみな何かをたよりにして生きています。ある人はお金を、ある人は科学の力を、ある人は自分自身を、またある人は人類の理性を、またある人は誰れかある特定の人を、たしかなたよりとして生きています。

さてそれらのものはみなある程度の力をもっていますし、生きる上にずいぶん役に立ち、力になってくれます。しかし最後までたのみになるか、というところではありません。長い人生の間には、それまでたいへんたよりにしていたものが何のたよりにもならなくなる、というようなことがいくたびかあります。そんな時には、人間はひじょうな不安におちいり、心がおちつかず、しつかりした考えをもって生きることができなくなり、つまずきます。

こんな時にわたしたちを支えてくれるのは、ただ信仰だけなのです。信仰とは、さきにあげたようなこの世のいつさいのものを越えた見えない神のいますことと、このかたが全能で愛にみちておられることへの心からの信頼です。この世にあるものが消えうせる時、永遠にいます神

への信仰だけが力となります。「信仰こそ世に勝たしめた勝利の力である」(ヨハネ第一、五・四)とありますように、人生に勝つためには信仰が絶対に必要なのです。

また、わたしたち人間は多くの欠点を持ち、自分勝手なところをもっています。ですから手放して自分自身をゆるし、肯定することはできません。なんとか自分自身を変えて行き、自分以外のもののためにも喜んで奉仕することができるようになるには、自己を新しくする必要があります。このことは人間の力によるだけでなく、神の力によらなければならないのです。

そこに信仰しなければならぬ第二の理由があります。

問2 宗教は社会的不幸の産物と思われませんか。だから社会の不合理を取り除き、よい社会体制さえ作れば、宗教はいらなくなりはしませんか。

答 理想の社会体制さえできれば、人間の不幸はすべてなくなるという考えは、現代における一つの空想または神話でしかありません。

もちろん社会の合理化によってひとびとは広く物質的安定をもちとることが出来ますし、そのことは社会正義という観点からいってつねに求めて行かねばならないことです。その点では

キリスト信者も社会的責任を負っております。

しかし、ここに二つの問題があります。第一は、果たして社会的矛盾は完全になくなるだろうかということ。おそろく、一つの矛盾が解消しても、社会を作る人間そのものが自己中心的であるということを変えない限り、また新しい矛盾が生まれ、この世が続く限り、なくなることがなく、どこかで人間は社会体制の矛盾に苦しまねばならないだろうと思われまじ、さらにいかなる体制のもとにあっても、人間は死の恐怖からまぬがれることができません。

第二は、かりに満足できる程度物質的安定をもちえたとしても、果たして人間はそこで真の幸福を感じられるだろうか、というところ。疑念だということです。現に、ソ連において人間の問題が起っており、社会保障制度の最も進歩した北欧諸国には、自殺者が世界一多く、少年犯罪がひじょうに多いという現象が起っています。これは、人は物質的安定のみでは真に満足できず、さらに何かに飢えているという人間性の複雑さを示しています。人間はパンだけで生きられる生物ではなく、パンのほか何かなくてはならないという理由がここにあります。この何かをあたえるものが真の宗教なのです。

真の宗教は、社会の合理化が進めば進むほど、いらなくなるどころか、ますます必要度をましてくるのです。(マタイ四・四)

問3 人間はいつも修養をつんで、まじめに生きておれば、別に宗教にはいらなくてもよいのではないのでしょうか。

答 もし人間が、修養によって、ほんとうに他人に迷惑をかけたりにすることがなくなり、さらにひとを愛しうるようになるのでしたら、宗教はいらないでしょう。ところが、実際にはそんな人間はひとりもないのです（ローマ三・一〇）。

もし、わたしは人に迷惑をかけたりに、がまんをさせたりしたおぼえはない、という人がいるとしたら、その人は他人の立場になってもものを考えることのできない精神的未成人です。

また、あの「自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい」（ルカ一〇・二七）という標準にてらして考える時、だれでも、ふだんは親切に見えるが、いざ自分自身があぶなくなってくると、他人を犠牲にしても自分を守ろうとするエゴイストであることに気がつくのです。孔子も「不善改むるあたわず、これわが憂なり」といつているとおりです。

このように、人はまじめになればなるほど、自分の罪の深さを知らされてくるのであり、どうしても、人間の力としての修養の限界というか、その無力というか、そういうことをまじめに取り上げねばならなくなるのです。だから、修養だけでは人間の根本的な問題は解決できないのです。

問 4 御利益宗教はなぜいけませんか。

答 「苦しい時の神だのみ」とありますように、わたしたちは、なにか実際の苦しみにあいますと、神にたすけを求めます。そして、神仏のおかげによって苦しみからぬけ出し、家内安全、無病息災、商売繁昌を得ようと願うのです。

この気持は人間の自然な情といえましょう。この気持をもとにして、現世的幸福を約束しているのがいわゆる御利益宗教というもので、新興宗教のほとんどがこれであります。

この宗教でも、人は信仰に、献金に、奉仕に、犠牲に熱心になります。しかし、それらは結局は自分がごりやくをうけたいための行為であります。「なさは人のためならず」という諺がありますように、信仰も自己犠牲も実は人のためでも神仏のためでもなく、自分自身のためです。ですから、そこでは、宗教そのものが自分の現世的幸福欲を中心としてなり立っているのです。

こういう信仰にはたして世の暗黒を照らすまことの光があるでしょうか。人の心をあたためる生命があるでしょうか。世の暗黒とは人間が結局は自分のことしか考えていないということなのです。そういう暗黒にいくわして絶望している人を救う力がその宗教にあるでしょうか。御利益宗教は人間が作った宗教でその本体は暗黒でしかありません。まことの宗教は、そのような

暗黒を克服しているものでなければなりません。もちろん、真の神は人間の現世における幸福に対しても決して無関心ではないのです。時になう助けと恵みをあたえて下さいます。しかし、それを第一の目的として、神信仰することはまちがいであります。

問5 「わけのぼる、ふもとの道は多けれど、同じたかねの月をみるかな」とあるように、どの宗教でも結局同じではありませんか。

答 たしかに、信じる人間のがわの態度とか精神については、どの宗教にも共通している点が多くあります。

しかし「いわしの頭も信心から」といわれるように、信じるものは何でもよい、信じる心がいせつだというのは宗教の一面を強調するあまり、真の神もいわしの頭もいっしょにしてしまう乱暴な考え方があります。信じる人間のがわの心がたいせつなように、それにもましてたいせつなのは何を信じるか、何に信心を捧げるかということです。

信仰とは相手に信頼し、身をゆだねて従ってゆくことです。もしまことの神でないものを神として信仰しようものならそれこそたいへんな結果になってしまいます。このように、信

じている対象が何であるかということによって、やがて人はすっかりちがった方向に導かれてゆくのですから、どのような宗教でも結局同じであるということはあやまりです。

宗教は単に儀式や生活習慣ではなく、人生を決定するよりどころでありますから、何でもよいという無責任な態度ではなく、真剣に考えて、ほんとうの宗教を選びましょう。

問6 信仰はひろく、いろいろの神をおがみ、おのおのの宗教のよいところをとればよいと思いません。一つの宗教にこるのは、人間を偏狭にしないでしょうか。

答 わたしたちの周囲にはそのような考えはすいぶん多いのですが、それは、すべてを含んでいたいへんよいように見えますが、実はあやまった考え方です。

たとえば、生花を習うのにも、あの流儀、この流儀と歩きまわっていて、はたして生花の真髓に達しうるかという疑問です。どれか一つの流儀に身をおき、そこに身をいれて修行して始めて体得できるのであります。宗教も全く同じです。一つの宗教に徹し、ひとりの神に身をゆだね、従いきらなければ信仰のほんとうのめぐみと力をうけることはできません。

また、人は一つのことに徹底することによって、かえって高められ、豊かにされるのであ

り、決して偏狭になるではありません。

また、結婚においてわたしたちはだれかひとりの異性を選び、よい日にも、悪い日にも愛と節操を全うしようとするように、ひとりの神を選び、その神に信心のまことをつくすのでなくては、責任ある信仰とはいえないでしょう。人間のがわのその時その時のつごうによって、あの神、この神とわたり歩くようでは、その人はまだ、ほんとうにたよりになる絶対の神を知らないということになります（ヨハネ四・一六―二六）。

問7 日本には先祖伝来の宗教があるのに、なぜ、わざわざ外国からきたキリスト教を信じる必要があるのですか。

答 わが国先祖伝来の宗教とは、神道と仏教でありましょう。

神道はわが国に発した最も古い素朴な自然宗教を本質としております。（自然宗教とは、山や海や雷など自然現象や普通の人よりすぐれた英雄、君主をただちに神としてあがめる宗教のことです）。この神道は、神社神道と宗派神道（天理教、大本教、金光教、黒住教など）に大別されますが、特に前者は明治以後、天皇中心の国家主義と深く結びつき不幸な結果をまねく



原因となりました。

仏教はその内容からいって、広い世界性をもった高度な宗教で、印度に始まり、中国、朝鮮をへて西歴五五二年に日本にはいつてきたもので、その後日本式に発達して今日に及んだものですから、日本古来のものとはいえません。しかし、日本人は外来のものだからといってこれを排斥せず、とり入れてかえってそれによって自らを豊かにしてきたわけです。日本が仏教によってどれだけ養われてきたかは申すまでもありません。

電灯は外国人のエジソンが発明したものだから使用しない。日本には日本伝来の行灯あんどんがあるという人はいないでしょう。よいものはどしどし取り入れてゆく、日本人の長所の一つである進歩的国民性によって、日本は近代国家として発展してきたのでありましょう。明治以後さらに終戦後、日本は新しい段階にはいりました。キリスト教にほんとうによいものがあり、新しい時代における生命があり、救いがあるならば、どうしてこれを退けてよいでしょうか。

元来、キリスト教は中東アジア地方から始まって西欧にはいったものですが、今日では、全世界にひろめられて、どの民族にも信じるものに救いをあたえ、希望をあたえてきた世界的な宗教です。わたしたちは孤立的な島国根性をすてて、広く世界性をもつようになりたいものです。宗教に国境を置くことはまちがいですし、また食わずぎらいになつてはなりません。

問8 現代のように科学が急激に発達し、さまざまの文明を生み出している時代に、やはり信仰は必要でしょうか。

答 科学が人間の生活にもたらした利益は数えきれぬほどほう大です。わたしたちは毎日その恩恵に浴して生活しております。ところで科学はわたしたちに利益だけをもたらしたのか、というところではなく、科学時代になって始めて、昔になかったような悩みをわたしたちは経験せねばならなくなりました。

その第一は科学が人間の仕事をいちじるしくオートメーション化することによって、人間をちょうど大工場内の機械の一歯車のように部品化し、こうして人間を人間としてとり扱うのではなく、機械や商品価値と同じくながめようとする風潮を生んでしまったということです。科学時代の中で今日ひとびとは著しく非人間化し、さらに本能化してしまいました。

また第二には、科学は原子力の発見によって、原水爆戦争の恐怖に人類をたたきこんでしまったということです。科学は人間を幸福にするとともに、また恐怖をもたらす結果となつてしまいました。どうしてこんなことになったのでしょうか。科学にその罪があるのでしょうか。そうではありません。科学そのものが悪いものではありません。科学を正しく用いなければならぬ人間が科学を万能視した結果、人間のためにははずの科学が、かえって人間を支配する

ことになってしまったからです。要は人間の問題です。

科学はますますオートメーション化し、人間の判断や個性をますます必要としなくなるでしょう。あるいはボタンを一つおせば、もはやとりかえしのつかぬ事態になる危険性をもっておられます。しかし、このような時代であるからこそ、どんな機械を作るか、いつボタンをおすかを判断する人間の思想がいよいよ重要な問題となるのです。科学そのものには道徳的的的はありません。それをあたえるのは人間です。

したがってその人間に正しい目的と思想をあたえる宗教はいよいよ重要さをましてくるわけです。まことの神をもたない人が科学の力を用いる時、しばしば大いなる悪が行なわれます。人間の尊重と人間性の回復とは、科学だけではできないのです。まことの神信仰を回復するのではなくては、この科学時代の危機をのりきることはできません。

問9 キリスト教を信じると、どんなよいことがありますか。

答 いろいろあります。恐らく数えきれないでしょう。

人生に新しい見方があたえられ、自分の心をしばっていたいろいろの束縛から解放、自由

さ、生まれかわり、人生に対する主体性、欠乏の中にも持ちうる充足感、感謝、平和、愛、喜び、忍耐心、また病気がいやされたり、禍いから守られたり、仕事がかどったりしてある程度の物質的現世的幸福をうけるということもあります。(ガラテヤ五・二二、ピリピ四・四―一三)

神は信じるものに、御自身の中にあるみちみちた恵みをわけあたえられます。ですから、信じる者は、自分の運命について根本的には思い煩う必要がなく、大いなる樂觀をもって生きることにがゆるされるのです。しかし、これらのことは信仰によって与えられる結果であって、始めからそれをあてにして、そのために信仰するというのは正しい信仰のあり方ではありません。

真のキリスト教信仰とは、結果や自分の運命がどうなろうとといったさいをまったく信頼して神におゆだねする心なのです。そういう無心な信仰になる時、神の平安が与えられ、力が与えられ、いろいろの恵みが与えられて導きをうけることができます。(コリント第二、一二・七―一〇、マタイ六・二五―三四、ペテロ第一、五・六―七)